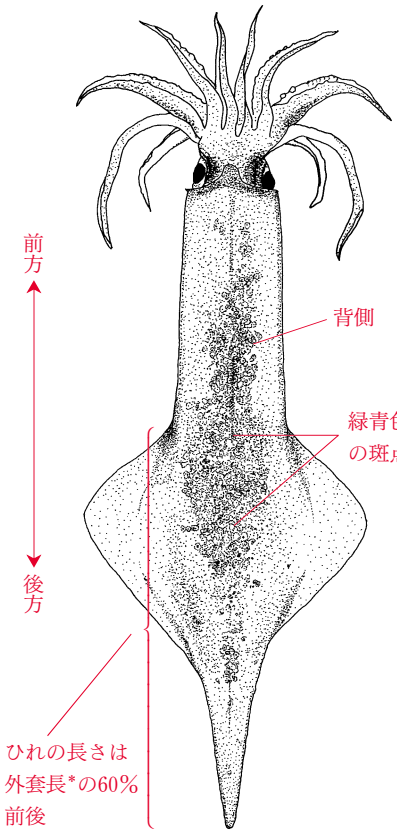
ツツイカ目Teuthoidea
ヤリイカ科Loliginidae



82. ヤリイカ

Loligo（*Heterololigo*）*bleekeri* Keferstein

図版33

英　名　spear loliginid squid

露　名　лолиго Блекера，кальмар Блекера

地方名（北海道）　ミズイカ、ゴウイカ

漢　字　槍烏賊、水烏賊

【形態】　体はきわめて細長い。ひれは縦長のひし形でやり状に後方へ伸び、その長さは外套長*の60%前後である。腕は外套長の1/4以下で、短く弱々しい。眼はスルメイカと異なり、透明な膜に覆われている。外套膜*腹側の正中線上にうねが走るが、雌ではそれがやや不明瞭である。生時には外套膜上に緑青色の斑点がある。

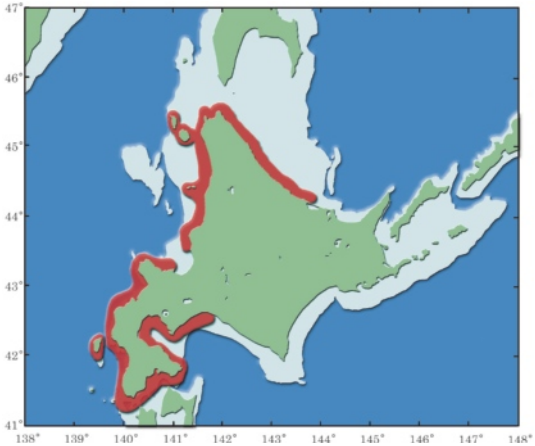
幼若期では成体*に比べ、外套膜の幅が長さの割に広く、腕が相対的に長い。大きいものは外套長40cmを超える。

【生態】　日本周辺の大陸棚*上とその縁辺および東シナ海北部から黄海に広く分布する。

しかし北海道での分布は、対馬暖流*や津軽暖流*の影響が及ぶ津軽海峡から噴火湾周辺、日本海沿岸、オホーツク海沿岸に限られ、寒冷な親潮*流域に相当する北海道東部の太平洋には生息しない。分布水温帯は6～18℃の範囲内である。

日本海には、能登半島を境に南北2系群*のヤリイカが存在し、北海道沿岸に来遊する群は、津軽海峡西口付近を中心として北海道から能登半島までの

海域に生息する系群であるという考えがある。また、盛漁期である春漁と秋〜冬の漁期に漁獲されるヤリイカは異なる系群であるとする考えもあるが、結論は出ていない。



北海道におけるヤリイカの漁場

以前は、ヤリイカの回遊*は、沿岸とその沖合を季節によって深浅移動するローカルなものと考えられていた。しかし、標識*を付けて放流したヤリイカが、津軽海峡内を東西に、あるいは北海道南部日本海から積丹（しゃこたん）半島周辺へ、さらに本州北部日本海から北海道南部日本海へ移動して再捕*されたことから、比較的大きな回遊をすることが明らかになってきた。

一般的には、春に沿岸寄りの水深の浅い海底で生まれた稚仔（ちし）*は、春から夏にかけてしだいに沖合の深みへ移動し、秋には水深100mから大陸棚縁辺付近で生活して成長する。冬には雄から先に岸近くへ寄り始め、その間に性成熟*が進行する。

水温の低下する冬に津軽海峡や日本海沿岸の岸近くの浅みに移動する産卵群は、産卵に適した水温帯を求めて暖流の上流方向である津軽海峡を西へ、日本海沿岸を南へ移動して産卵すると考えられている。春には水温上昇に伴って産卵群の分布が津軽海峡を東へ、北海道の日本海側を北へ広がり産卵盛期を迎える。ヤリイカは岸近くの水深５〜40mで産卵し、その後雌雄とも死ぬ。寿命はほぼ１年と推定されている。

雄は雌より早く性成熟し始め、二次性徴*として雄の左第４腕*が交接腕*として変形し、吸盤列の間にとさか状の肉質の隆起が形成される。交接*は、主に日没から夜間に行われる。

雌はスルメイカ類と違って、交接後すみやかに産卵場所を探し、早ければ翌朝までに産卵する。ヤリイカの卵は、卵のう*と呼ばれるゼラチン質でできた細長い袋に入った状態で、主に岩礁（がんしょう）地帯の潮通しの良い岩棚の天井面に房状に産み付けられ、垂れ下がる。ときには海藻や海底の砂地、沈んでいる木の枝や漁網などにも産み付ける。

卵のうは長さ約５～24cmで、１つの卵のうの中には、長径2.5mm、短径1.8mmほどの卵が、約30～170粒入っている。産卵する前の体内にある卵の数は、外套長19～25cmの個体で1,700～3,900粒、平均2,800粒程度である。産卵からふ化までの積算水温*は656℃・日という実験結果があり、10～20℃で36～47日を要する。

ふ化直後の幼生*は外套長約３mmで、すでに自由に遊泳することができる。ふ化後３カ月で平均25mm、６カ月で11cmになるが、成長は個体差が非常に大きい。その後、雌雄で成長に差が生じ、雄は雌より大きくなる。９カ月で雄は外套長23cm、雌は19cm、12カ月で雄28cm、雌22cmに達する。

ヤリイカは、稚仔期には主にカイアシ類*を食べ、成長に伴ってアミ類*やヨコエビ類*なども食べるようになる。未成体*期はこれらのほかオキアミ類*、ヤムシ類*などのプランクトンを主な餌とするが、小型魚類も食べるようになり、成体期には魚類の割合が高まる。